

スティーヴ・Y・西浦著「リテンションストラテジー - 有望な人材を活かす、残す - 」

かんき出版 2001年3月6日刊を読む

同質性から多様性へ - 差別的文化の排除 -

1. かつて、戦後の日本経済の飛躍的成長は、日本が同質的社会だからこそ達成できた、とまでいわれた。しかしグローバル化と少子化・高齢化が進行する中で、従来、日本の強みであったはずの社会の同質性が、いまでは足かせになりかねない状況にある。
2. 同質的文化は、差別的文化になりやすい。同質的でない者を排除する傾向は、学校のイジメの問題に如実にあらわれている。企業内でも同じである。権威または影響力のある人が、「私はこう思う」というと、付和雷同して全員一致の結論にまとまりやすい。その流れに反して異論をはさむ異分子になるには、相当な勇気がいる。
3. 最初から反対分子を封じ込めるような雰囲気の中で意思決定がなされるという非論理的な意思決定プロセスのもとでは、反対分子はいつまでたっても目の見ない。この環境では、リーダーの判断が正しければ、それなりの成功は納められるかもしれないが、判断が間違っていれば、全員自滅の道をたどることになる。オール・オア・ナッシングのアプローチである。
4. 一方、アメリカの強みは、雑種の強みである。「人種の^{るっぽ}坩堝」と呼ばれるアメリカでは、誰かが、「私はこう思う」というと、必ずといってよいほど、それに反論する人があらわれる。そして、お互いに、堂々と表の世界で自己の意見を述べ合う。
5. 完全燃焼した議論は、仮に自分の意見が通らなくても後腐れがないし、極論者同士のカドがとれて、結果的にバランスのとれた健全な結論に落ち着くことが多い。仮に、どうしても意見が合わなければ、分離・分裂して「わが道をいく」というオプションもある。
6. グローバリゼーションとは、異質な文化や社会および多様な価値観を背景にした国や人びとが同じ舞台上で交流することである。同質性を求めて異分子を排除しようとする傾向のある日本には、大きなチャレンジである。
7. サンフランシスコ州立大学のデビット・マツモト教授は、その著『日本人の国際適応力』の中で、「日本人はほかの外国人に比べて異文化適応性が著しく劣る」と指摘している。この結論が、自尊心度、自己受容度、曖昧なことに対する忍耐度、批判的な考え方と創造性、開放性と柔軟性、の四つの心理要素の観点から定量的分析を行なった結果であったところが興味深い。

ちなみに、 の要素以外は、その度合いが高いほど異文化適応性が高いことになる。

- 8 . マツモト教授が指摘するように、日本人の国民性として、本質的に異質性や多様性を受け入れない要素が強いとすれば、日本のグローバリゼーションへの道はきわめて遠いといわざるをえない。

P104 ~ 106

[コメント]

グローバルリーダーを目指す日本人の最大の克服課題がよく指摘されている。一行、一行、すべて参考になる本だ。

- 2011年5月28日 林 明夫記 -